

BREAK  
ブレイク (第12回)  
INTERVIEW  
インタビュー



江戸時代、秩父の養蚕農家が

規格外の「くず繭」を使って作った

自前用の着物「秩父太織」。

その技術を今に引き継ぐ女性織り士

北村久美子さんに、太織の魅力を伺いました。

太織をはじめたきっかけは何ですか？

はじめは染色をやりたいと思って、21歳のとき就活のために捺染の工房へ面接に来たのが秩父との最初の関わりでした。でもそのときは景気が悪く、捺染の職人さんがほとんど辞めてしまったあとで…。そのとき秩父の機織りの職人さんが銀座で個展をしていると聞いて、行ってみたのが最初の出会いです。

そのときに太織の師匠さんと出会ったんですね。

はい。そのとき小さな居坐機で実演もされていて。すごいなと思って、何年くらい頑張ったらできるようになるんですかと聞いてしまつて。7〜10年やればできるようになるよ、きてみればと言われたので、しばらくして本当に履歴書を持って師匠のところへ行つたんです。

7〜10年！21歳でこの世界だけと覚悟して飛び込まれたんですね。不安などはなかったのですか？

深く考えていませんでした(笑)。いわゆる機織りの基本も知らないし、織物がどういう風にできるのかも全く知りませんでした。ただ見た布だけで決めてしまつたので、不安より先に、覚えなくちゃいけない、やらなくちゃいけないという思いでした。

出会いの時に感じた太織の魅力は何だったのですか？

決して派手な物ではなかったのですが、「触りたい」というのがはじめの感想です。私も使っていて気持ちのいい物作りしたいと思いました。

辛かったことなどはありましたか？

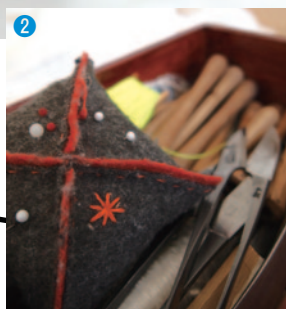
休日には家に帰ったり、友達と遊んだり。バランズを取つてやつていたので、辛くはありませんでした。最初は秩父に馴染むのが大変でしたが、3年目に入つて捺染の講座にも参加するようになり、そこでのいろいろな人と交流をもつて嬉

愛着とともに楽しみが  
増える物をつくりたい。

人と交流をもつて嬉しかったです。染色もやりたかったことなので。節目節目でいろいろな人に支えて

いただいて今に至るなと思います。  
今後太織を続けていく中で大切にしたいことは何ですか？

受け継いだ物を次へ繋いでいくこと。また、着物のように特別なものだけではなく、私はフランクットやシャツ地など、できる限り日常で使ってもらえる物をつくつていきたいです。太織は扱いやすく、お家で洗えて、皺もよりつらいんです。使うほどに育っていくので、愛着とともに楽しみが増える物をつくつていきたいです。



①蜂の巣柄といわれる織り方のショール。「きびそ」と呼ばれる出始めの糸を織込んであるため、色や太さに微妙なばらつきが出て、独特の素朴な風合いが生まれている。②いつも持ち歩いている道具箱。スウェーデンのシェレフテオ市で秩父銘仙の交流展覧会を行った後、現地の人が来日した際にいただいたという針山も。③1996年に師匠からいただいたという機ばさみ。使う人の「くせ」が現れる、自分だけのばさみ。④2年前から使っている北村さん愛用の漆塗りのスプーン。北村さんの生活を豊かにする“モノ”。

北村 久美子

埼玉県浦和市(現在のさいたま市)生まれ。短大卒業後、秩父太織と出会い、以来20年、師匠の元で太織を織り続ける。今年2014年に独立。秩父市内に工房を構え、制作を続けている。